

平成30年度 学校評価表

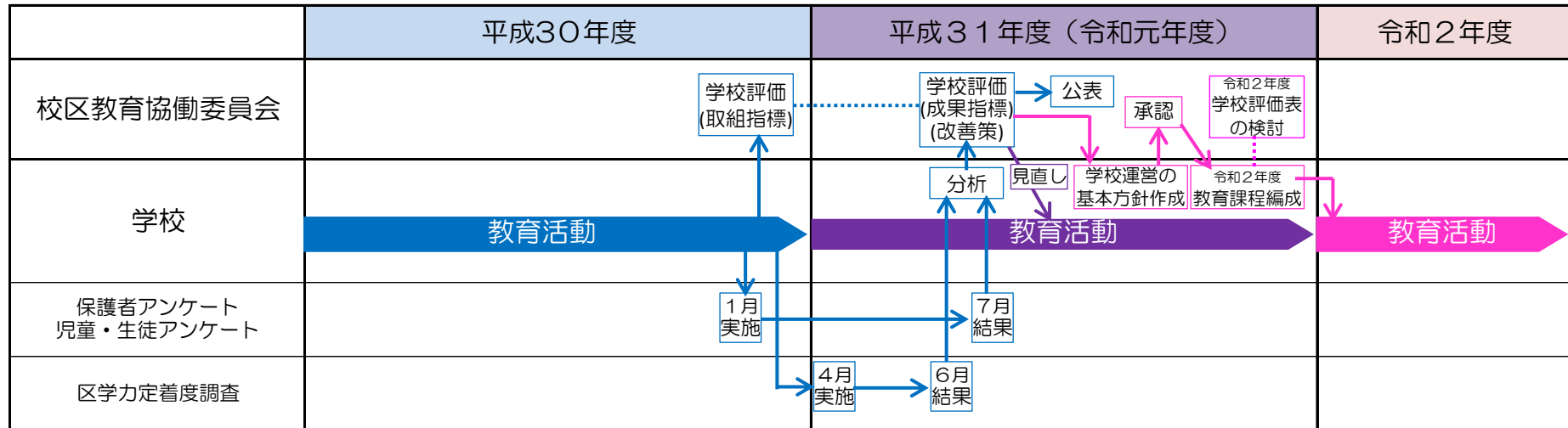
品川区立大井第一小学校 校長 藤森 克彦
 大井第一小学校校区教育協働委員会 委員長 佐々木 文彦

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 平成30年3月30日教育長決定要綱第7号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※平成30年度の学校評価が平成31年度（令和元年度）および令和2年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



平成30年度 学校評価 品川区立大井第一小学校

評価項目1 (学力に関すること)

重点目標		○義務教育後期課程につながる、生きて働く力の基礎となる、学力の定着・向上を図る。 ・基礎基本の確かな定着を図るために、学力向上部による児童の実態把握を通して、系統的な指導を徹底する。 ・東京ベーシックドリル等を活用し、基礎・基本となる学力を身に付けさせる。 ・校内研究を通して、多様な意見が出る授業を行い、自分の考えをもつことができる児童を育成する。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	全国(6年)、都(5年)、区(2-6年)の各学力調査において、全教科・領域で各平均値、目標値を上回る。	多くの学年で全国平均、都平均を上回っており、おおむね達成できているが、理科や社会など未達成の科目や学年もある。	B	コミュニティ・スクールが運営している未来塾において学力低位の児童の学習活動に取り組むなど、着実に改善が図られている。指導員と教員との情報共有をさらに活発にして生かしていきたい。 理科の学力向上については、理科系の卒業生の協力などを通じて、児童が実験や観察に親しむ環境を整えることを検討したい。
	学力向上部を中心に各学力調査結果を考察し、重点目標や授業改善策を明らかにして全学年・学級で意図的な授業を行い、基礎・基本となる学力を身に付けさせる。	課題が見えていることについて高く評価する。学力低位の児童に対して、引き続き具体的に対応し続けてほしい。家庭との連携についても検討して進めてほしい。	B	
②	単元末・学期末テストで、目標値(80%以上)を身に付けている児童80%を目指す。(国語・算数・理科)	個別指導や反復学習の成果もあり、多くの学年で目標を達成できている。	A	児童の多くは平均点以上をとれる環境にあるが、一方で学力低位の児童に対してはさらなる指導強化が必要である。苦手な科目・分野を作らないように、つまずきやすい単元の指導法を学年内で共有するなど、低学年のうちから対策を講じたい。また、学習習慣が身に付いていない児童については家庭との連携を密にし、継続的な指導体制を確立していきたい。
	東京ベーシックドリル、診断シート・学期末テストを活用し、学力を定期的に掌握するとともに、個々に応じて「立ち返りの指導」「繰り返しの指導」等個別指導を徹底する。	学習成果が出ており、有効な指導がなされていると考える。立ち返りの指導を通して、「できる」という実感を子どもにもたせてほしい。「立ち返りの指導」、低学年からの「繰り返しの指導」を通して、定着を図っていただきたい。	A	
③	学校生活アンケート(5月、10月、2月実施)、設問「授業に意欲的に取り組んでいる」において肯定的な回答80%以上を目指す。	いつも教室が活気にあふれており、児童が生き生きと授業に取り組んでいる姿が見受けられる。先生方がアクティブラーニングの参加型授業を心掛けていることが児童の意欲的な学習につながっていると考えられる。	A	個々の先生方の、授業をよりよい物にしようという意欲が随所に見受けられる。アクティブラーニングは教育の手法ではなく学習の原点である。しかし、児童が自ら疑問を抱き、考え、解決する活動を力強くサポートする授業を展開するためには先生方の技術や経験が必要である。より多くの先生方で知識・情報・体験を共有しながら、児童が楽しく学べる場を創り続けていただきたい。
	校内研究「多様な意見が出る、楽しい授業」を通して「自分の考えをもつことができる」児童の育成、「多様な意見が出る授業ができる」教員を目指す。	難しい研究に挑戦していることを高く評価する。子どもたちが成長するにつれて考えが深まり、それによって多様な意見が出るという視点を大切にして、自信をもって進めてほしい。「多様な意見が出る、楽しい授業」は成長段階で異なるため、低中高学年ごとの具体的な指標が必要ではないか。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

平成30年度 学校評価 品川区立大井第一小学校

評価項目2 (人間性や社会性に関すること)

重点目標		○義務教育9年間を見通し、社会の一員としてよりよい生活や人間性を築く。 ・「あいさつ隊」等の取組を通して、気持ちの良いあいさつ、明朗快活な返事、正しい姿勢、礼節ある言動を身に付けさせる。 ・「大スタンダード」の実践を通して、規範意識を育て、態度や価値、実践力をはぐくむ。 ・代表委員会の活動・クラブ活動・フレンドタイム等の取組を通して、高学年児童のリーダーシップを育成する。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	学校生活アンケート(5月、10月、2月実施)、設問「自分からあいさつをしている」において肯定的な回答80%以上を目指す。	自発的にあいさつができていない児童もいるが、できていない児童も多く見受けられる。先生方はあいさつ、声掛けに取り組んでいるので、引き続き根気よく続けていく必要がある。	B	あいさつはコミュニケーションの基本である。家庭内のあいさつと学校内のあいさつを、基本的な生活習慣の一つとして身に付けるよう、保護者にも呼び掛けるなどして徹底していきたい。一方、校外でのあいさつについては、防犯上、難しい面もある。子どもたちが安心してあいさつできる環境づくりに、コミュニティ・スクールとしても取り組んでいきたい。「大人あいさつ隊」の組織等を検討したい。
	児童が気持ちよくあいさつ・会釈することができ、時と場に応じて礼節のある言動をとれるよう指導する。	教職員のあいさつの姿勢は良好であり、児童に対する繰り返し指導もなされている。校外で進んであいさつできている児童もいるが、個人差がある。時と場合に応じたあいさつの在り方については家庭への啓発や取組も必要である。また、高学年の心の成長に応じて一律に判断できない面もある。	B	
②	学校生活アンケート(5月、10月、2月実施)、設問「きまりを守って学習・生活している」において肯定的な回答80%以上を目指す。	おおむねきまりは守られており、成果指標は達成していると評価できる。ただし、教職員の自己評価ではBの割合が多く、まだ徹底されているとは言えない状況である。	A	「きまりは守るべきもの」という大前提があるが、「きまりだから守る」というのではなく、「なぜこのきまりがあるのか」を理解しなければ守れなかったときに反省が難しくなる。低学年のうちから、「何のためのきまりか」を考えたり理解したりする習慣を身に付けさせたい。
	児童が、「大スタンダード(きまり)」をまもって学習や生活をし、家庭・地域、日常生活に生かせるよう指導する。	高学年が決まりを守らなくなるのは心の成長の一過程である。無条件に守らせるのではなく、きまりの必要性について自分自身で考え、理解する必要がある。	B	
③	全国学力学習状況調査の児童質問紙の設問「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」において肯定的な回答80%以上を目指す。	成果指標は達成されており、運動会やフレンドタイムにおいて、高学年のリーダーシップは十分に発揮されている。	A	「人の役に立つ人間になりたい」という表現からは「人の役に立たない人間」の存在が想起されるので注意を要するが、自己有用感、子どもたちが安心して生きるために大切な思いである。本校が目指すリーダーシップは人を命令に従わせるのではなく、メンバーの立場を思いやり、皆が理解し合えるための要として努力できる存在であろう。今後とも児童が人として成長するための環境づくりに努めたい。
	学校行事、代表委員会やフレンドタイム等の主体的活動、異学年交流活動を通して、自己有用感、高学年のリーダーシップを育てる。	最高学年のリーダーシップを全教員で育成しており、それを見下す学年の児童も意識をもって進級できている。リーダーシップを発揮する土台を児童たちは身に付けている。リーダー層以外の児童たちにも意図的に役割を与えることによって、自己有用感を高めていけるとよい。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

平成30年度 学校評価 品川区立大井第一小学校

評価項目3 (体力・健康に関すること)

重点目標		○健康・安全に関する指導を通して、自ら進んで健康の保持と安全に努める能力と態度を育成する。 ・朝の時間や体育朝会を利用してコーディネーションに取り組み、体力向上を図る。 ・スポーツトライアルについて、運動委員会による体育朝会や、学級ごとに取り組み。また、マラソン週間ではマラソンカードを活用して、体力向上を図る。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	東京都体力運動能力調査では、本区の平均以上の数値である種目が、各学年において半分以上であることを目指す。	3ポイント以上、またはそれに近いポイント向上が見られる学年もあるが、「3ポイント以上の向上」という成果指標は見直しが必要かもしれない。	A	3ポイント以上という成果指標は見直しが必要である。引き続きコーディネーションなど、日常的に身体を動かす取組を続けるとともに、「体力向上」を心掛けることが、児童の心身の健康にとっていかに大切かということを経験も児童も再認識し、地道に活動を継続していきたい。
	朝の時間や体育朝会を利用してコーディネーションに取り組み、体力向上を図る。	体幹を鍛えることは脳の働きにも効果的なので、高学年こそ大切に取り組んでほしい。 また、この種の取組は持続が大切なので、教員、児童が大切な取組と認識し、年間を通して継続して取り組んでほしい。	B	
②	東京都体力運動能力調査の結果に基づき評価・考察し、日常の体力向上の取組に生かす。	評価・考察の結果が取組みに積極的に生かされている。	A	コーディネーションを含め、スポーツトライアル、ランニングなど、児童個々人の目標と指標を明確にしながら取り組み、運動する楽しさ、日常的に身体を動かすことの大切さを実感できる取組を進めていきたい。
	体育朝会や学級ごとにスポーツトライアルに取り組んだり、マラソン週間を通して、体力向上を図る。	十分取り組めっていると評価する。 課題については改善を図り、引き続き取り組んでいただきたい。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 (いじめの防止の取組に関すること)

重点目標		<p>○全教育活動を通して、自尊感情を育てるとともに、自他の生命を尊び、あらゆる偏見や差別をなくし、人権を尊重する態度を育成する。</p> <p>・「伝え合い、学び合う授業」を通して、友達のものの見方や考え方の多様性にふれ、相互に相手を尊重し合う心を養う。</p> <p>・日常の全教育活動での児童観察、生活アンケートの実施、SCの面談(5年全員)等を通して児童の人間関係を把握し、「いじめ対応委員会」を中心に全教職員でいじめの早期発見と解決を目指す。</p> <p>・人間的ふれあいのある豊かな体験活動を通して、困難に負けない「強い心」をはぐくむ。</p>		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	生活アンケート(6月、10月実施)、設問「友だちと仲良くしていますか」において肯定的な回答80%以上を目指す。	市民科の授業等を通して、人権やいじめ等の問題について児童が学び、考える機会が設けられており、成果指標は達成されている。	A	<p>「友だちと仲良くしている」と言える状態は、時に努力なしに実現できることではなく、「自分をも友だちをも大切にする」という強い意志に支えられるということ、低学年のうちから分かりやすく理解できるように指導する必要がある。学年が上がるにつれて「生命の大切さ」の学びを含め、思春期に向けた大切な準備を進めたい。職員間の情報共有等、今後も努力を続けていきたい。</p>
	いじめは相手の人権を無視した犯罪行為であることを自覚させ、市民科の人間関係形成領域の学習を重点に行い、いじめ根絶を目指す。	様々な角度から問題をとらえ、前向きに丁寧に指導がなされ、十分な分析もなされている。職員会議での対策を引き続き行い、今後とも「見逃さない、ぶれない」指導に期待する。	A	
②	生活アンケート(6月、10月実施)の結果や日常の行動観察を通して、いじめを早期発見し、解消率を100%にする。	各学年において児童の行動をよく観察し、問題があれば早期に解決に当たり、職員間で情報を共有している。「解消率100%」という数値目標の立て方には問題があるかも知れないが、「100%解消されるべきものである」というポリシーを尊重したい。常に「100%解消できているかどうか」を問い続けて対応に当たっていることを高く評価したい。	B	<p>いじめはいけないと知っているにもかかわらず、いじめをしてしまう。そこには必ず背景がある。いじめを未然に防ぐ努力をするとともに、いじめの兆候があった場合、事態を表面的に解決するのではなく、その子どもが抱えているものを注意深く見ていく必要がある。保護者との情報交換も含め、引き続ききめ細かい指導をお願いしたい。コミュニティ・スクールとしても、生命を大切にする教育、人権教育の推進に貢献する可能性を検討したい。</p>
	いじめの早期発見・早期解決に努め、児童の一人一人を細やかに観察し、保護者と連絡を密にし、校長中心に全校体制で対応する。「生命を大切にする学習」等を通して、自他ともに大切にしようという心やコミュニケーション能力を育て、いじめのない学級、学校を築く。	情報共有し、早期の対応がなされていることがよく分かる。今後も情報を記録し、全教員で共有していただきたい。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 (保護者・地域との連携に関すること)

重点目標		<p>○地域や保護者の理解のもと、教育活動を行っていく。 ・ホームページ上で、各種行事や各学年の取組、学力定着状況など、学校教育に関する様々な情報を速やかに公開し、保護者が本校の教育活動を理解できる機会を提供する。 ・正門掲示板には、教育活動の様子を写真や文章で伝えたり、行事の案内を載せたりして、地域の人々の学校教育への参画意識を高める。</p>		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	学年・学級便りは月1回以上発行する。HP、掲示板の更新は各行事実施後や月1回以上行う。	学校・学年・学級便りを通して教育活動がよく分かる。学年便りは月1回以上発行できているものの、学級便りについては毎月発行できていない学級もある。	A	保護者の理解を深め、絆を深める意味でも、学級便りの果たす役割は大きい。忙しい中、定期的に学級便りを発行するのは困難を伴うが、効率よく学級だよりを作成するノウハウを教員間で共有してほしい。教員に時間的余裕を持っていただくためにも、コミュニティ・スクールとして教員の負担軽減に貢献したい。
	学校、学年・学級だより、運動会等行事の取組通信、また、HP、掲示板など様々な機会を活用して有用な情報を発信する。	学年や学級の通信は充実している。HPについては、担当者を中心に、適宜更新してずい時発信する必要がある。更新方法については協働委員会も含め、検討していく。	A	
②	ボランティア登録数を100人以上にする。	地域コーディネーターの尽力により成果指標は十分に達成されている。ボランティア相互の交流も活発化し、活性化している。	A	校区教育協働委員、地域の方々、保護者、卒業生はもちろんのこと、それぞれのもつコネクションを積極的に用いて様々な分野の人材を発掘・取り込み、子どもたちの教育に役立てていただきたい。本校のコミュニティ・スクールはまだまだ発展の可能性もある。コミュニティのサポートが教員の時間的負担軽減につながることを意識しながら、従来の活動を大切にしつつ、新たな試みにも取り組みたい。
	保護者・地域人材・文化・施設や人材の活用を積極的に行い、保護者・地域の力を学習に十分活用する。	学校地域コーディネーターを中心として、コミュニティ・スクールが機能し、地域との連携が深まり、子どもたちにとって有意義な1年であった。来年度、校区教育協働委員会としての主体的な活動を提案していく。また、活動できる人材・取組を提案していく。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成